

# 猿蟹合戦

芥川龍之介

青空文庫



蟹かにの握り飯を奪さらつた猿さるはどうとう蟹かにに仇かたきを取られた。蟹かには白うす、  
 蜂はち、卵たまごと共に、怨おんてき敵てきの猿さるを殺したのである。——その話はいま  
 さらしないでも好よい。ただ猿さるを仕止めた後のち、蟹かにを始め同志のもの  
 はどう云う運命うんめいに逢ほう着ちやくしたか、それを話すことは必要である。  
 なぜと云えばお伽とぎ噺ばなしは全然このことは話していない。

いや、話していないどころか、あたかも蟹かには穴あなの中に、白しろは台  
 所の土間どまの隅すみに、蜂はちは軒のき先の蜂はちの巢さきに、卵たまごは粿もみ殻がらの箱はこの中に、  
 太平無事な生涯せいぜいでも送おくつたかのように装よそっている。

しかしそれは偽いつわりである。彼等かれらは仇かたきを取つた後、警官けい官の捕縛ほぼくする  
 ところとなり、ことごとく監獄かんごくに投なげられた。しかも裁判さいばんを

重ねた結果、主犯蟹は死刑になり、白、蜂、卵等の共犯は無期徒刑の宣告を受けたのである。お伽噺のみしか知らない読者はこう云う彼等の運命に、怪訝の念を持つかも知れない。が、これは事実である。寸毫も疑いのない事実である。

蟹は蟹自身の言によれば、握り飯と柿と交換した。が、猿は熟柿を与えず、青柿ばかり与えたのみか、蟹に傷害を加えるように、さんざんその柿を投げつけたと云う。しかし蟹は猿との間に、一通の証書も取り換わしていない。よしまたそれは不問に附しても、握り飯と柿と交換したと云い、熟柿とは特に断っていない。最後に青柿を投げつけられたと云うのも、猿に悪意があつたかどうか、その辺の証拠は不十分である。だから蟹の弁護に立つ

た、雄弁の名の高い某弁護士も、裁判官の同情を乞うよりほかに、策の出づるところを知らなかったらしい。その弁護士は気の毒そうに、蟹の泡を拭ってやりながら、「あきらめ給え」と云ったそうである。もつともこの「あきらめ給え」は、死刑の宣告を下されたことをあきらめ給えと云ったのだか、弁護士に大金たいきんをとられたことをあきらめ給えと云ったのだか、それは誰にも決定出来ない。

その上新聞雑誌の輿論よろんも、蟹に同情を寄せたものはほとんど一つもなかったようである。蟹の猿を殺したのは私憤しふんの結果にほかならない。しかもその私憤たるや、己おのれの無知と軽卒けいそつとから猿に利益を占められたのを忌々いまいましがったただけではないか？ 優勝劣

敗の世の中にこう云う私憤を洩らすとすれば、愚者にあらずんば狂者である。——と云う非難が多かつたらしい。現に商業会議所会頭某男爵のごときは大体上のような意見と共に、蟹の猿を殺したのも多少は流行の危険思想にかぶれたのであろうと論断した。そのせいか蟹の仇打ち以来、某男爵は壮士のほかに、ブルドッグを十頭飼ったそうである。

かつまた蟹の仇打ちはいわゆる識者の間にも、一向好評を博さなかつた。大学教授某博士は倫理学上の見地から、蟹の猿を殺したのは復讐の意志に出たものである、復讐は善と称し難いと云つた。それから社会主義の某首領は蟹は柿とか握り飯とか云う私有財産を難有がたがつていたから、白や蜂や卵なども反動的思

想を持っていたのであろう、事によると尻押しをしたのは国粹こくすい会かいかも知れないと云った。それから某ぼうしゆう宗の管長某師は蟹かにはぶつじひ仏慈悲を知らなかつたらしい、たとい青柿を投げつけられたとしても、仏慈悲を知つていさえすれば、猿の所業を憎む代りに、反かえつてそれを憐んだであらう。ああ、思えば一度でも好いいから、わたしの説教を聴かせたかつたと云った。それから——また各方面にいろいろ批評する名士はあつたが、いずれも蟹の仇打ちには不ふ賛さんせい成せいの声ばかりだった。そう云う中にたつた一人、蟹のためにしゆごう酒豪兼詩人の某代議士である。代議士は蟹の仇打ちとまは武士道の精神と一致すると云った。しかしこんな時代遅れの議論は誰の耳にも止とまるはずはない。のみならず新聞のゴシップ

によると、その代議士は数年以前、動物園を見物中、猿に尿いばりをか  
けられたことを遺恨いこんに思っていたそうである。

お伽とぎばなし 嘶ししか知らない読者は、悲しい蟹の運命に同情の涙を

落すかも知れない。しかし蟹の死は当然である。それを気の毒に  
思いなどするのは、婦女童幼のセンチメンタリズムに過ぎない。  
天下は蟹の死を是ぜなりとした。現に死刑の行われた夜よ、判事、検  
事、弁護士、看守かんしゅ、死刑執行人、教誨師等きょうかいしは四十八時間熟睡  
したそうである。その上皆夢の中に、天国の門を見たそうである。  
天国は彼等の話によると、封建時代の城に似たデパートメント・  
ストアらしい。

ついでに蟹の死んだ後のち、蟹の家庭はどうしたか、それも少し書



いて置きたい。蟹の妻は売笑婦ばいしょうふになった。なつた動機は貧困のためか、彼女自身の性情のためか、どちらか未いまだに判然しない。蟹の長男は父の没後、新聞雑誌の用語を使うと、「翻ほんぜん然と心を改めた。」今は何でもある株屋の番頭か何かしていると云う。この蟹はある時自分の穴へ、同類の肉を食うために、怪我けがをした仲間を引きずりこんだ。クロポトキンが相互扶助論そうごふじょろんの中に、蟹も同類を劬いたわると云う実例を引いたのはこの蟹である。次男の蟹は小説家になった。勿論もちろん小説家のことだから、女に惚ほれるほかは何もしない。ただ父蟹の一生を例に、善は悪の異名いみようであるなどと、好いい加減かげんな皮肉を並べている。三男の蟹は愚物ぐぶつだったから、蟹よりほかのものになれなかつた。それが横這よこばいに歩いていると、握

り飯が一つ落ちていた。握り飯は彼の好物だった。彼は大きい鋏はきみの先にこの獲物えものを拾い上げた。すると高い柿の木の梢こすえしらみに虱を取っていた猿が一匹、——その先は話す必要はあるまい。

とにかく猿と戦ったが最後、蟹は必ず天下のために殺されることだけは事実である。語を天下の読者に寄す。君たちもたいてい蟹なんですよ。

(大正十二年二月)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 猿蟹合戦

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>